モテる律儀の不幸とモテない性悪の幸福論

風魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モテる律儀の不幸とモテない性悪の幸福論

【Ｎコード】
Ｎ９２２５Ｆ

【作者名】
風魔

【あらすじ】
顔はいいのにモテない性悪と馬鹿。そんな２人の目の前で、この広い青空の下、女子に追い回される友達の律儀君を見て…

「…女子の声はよく響くねぇ…」
爽やかな風吹く快晴の下、屋上で一人の男が呟いた。

モテる律儀の不幸とモテない性悪の幸福論

「…ネェ、学校一モテないであろう性悪サン？」

「…ナンダイ、学校で二番目にモテないであろうデリカシーなし野球馬鹿サン？」

「…長くね？」

「気にすんな」

そう言うと男は目の前のミルクコーヒーを啜った。あまりの熱さに舌を火傷したようで、「あちっ」と一声叫ぶと冷ますために舌をベッと出した。

「ま、それは冗談として…勇樹、目の前の事態…どう見る？」

「あ？…ほへほはひょひひほひょはへへふ」

「ベロ出して喋ったら訳わかんねぇっての。どこぞの宇宙人だ」

「…冥王星」

「太陽系でもないのかよっっ」

「いちいちうるせー。我らが友のモテ男が可愛い可愛いお花達に襲われてる、これで満足デスカコラ」

「…言葉の意味がワケワカメなんデスがコラ？」

もっと正確に言葉を紡げば、学校一のモテ男の透が追っかけ隊の女子共に追われてる、とでも言えばよいのか。
とにもかくにも、現在2人の目の前では追いっ追われつの壮絶バトルの最中である。

「…にしても、奴も律儀な奴だよホント」

「リチギ…って何？」

「…信也、野球もいいが少しは勉強しろや。ようは真面目君って意味だよ」

「なーるヘソ。確かにな～、貰ったラブレターも一枚残さず全てとってあるし」

「もう２００通はなったろ、アレ。いい加減資源ゴミに出さねーと、アイツの部屋で雪崩が発生するぞ」

「…告白も1人ずつちゃんと聞いてるし」

「1回お経並みに長いのあったよな。絶対アイツ、立ったまま寝てたぞアレは」

「…ホワイトデーも全員に返したし」

「2ヶ月分の小遣いが一気に消えたらしいがな。あぁ愉快愉快、はははは」

「…やっぱ性悪」

「今更だろ？」

一々嫌味を付け足して言葉を返す勇樹に信也は溜息をつきながら目の前の光景を見やった。

相変わらず、透は女子の黄色い声に負けない位の大声をあげながら必死の形相で逃げている。

「てかさ、またバレンタインの時期がくるな」

「菓子業界の策略がかいまみえる日か…アイツにとっては最悪のイベントだよな。甘いのなんてミルクコーヒーさえアウトなのに…」

「また鼻血と吐き気の日々かな…透は」

「わざわざ全部食うからだろ…たく、羨ましい通り越して哀れだ」

「でも、モテる奴って甘いもの苦手な奴が多いよなー。俺も苦手になればモテるかな？」

「無理に1万円。それはあくまで大半のモテる奴の付属品だろ？」

「そっか。でも勿体無いよな…美味しいのに」

「ま、確かに人生の半分は損してるよなー」
そう言ってから、丁度良く冷めたミルクコーヒーを勇樹はゴクゴクと飲み干す。
「ぷはぁ…あ～身に染みる…」
「親父臭っ…そういや透ってさ、班分けのときも大変だよな」
「あー…愛人同士が1人の男を奪い合うが如くの修羅場だよな」
「…アイ人が音子を乳母言い合うって何？」
「アイ人って何だよ」
「ぇ…アイルランド人略してアイ人？」
「略すなよ。お前はなにか？アメリカ人も長いからってアメ人とか言う口か？日本人も日人かコラ」
「や、違うけど…その班分けの光景さ、今の状態に似てない？」
「あ？」
勇樹は目の前を見やった。逃げたのも空しく、透は女子に捕獲されており、体中のあらゆる部分を掴まれては引っ張られている。
人形だったら忽ち布が引き裂かれるだろう、そんな勢いで。
透はこっちに顔を向けた勇樹に気づいたのか、今にも死にそうな顔で叫んだ。

「勇樹！信也！助けろぉ！！」

「…助けろーだって…どうする？」

「助けるならテメェ1人で行ってこい。俺は馬に蹴られて死ぬなんてダサい最後は御免だ」

「馬？」

「よく言うだろ、人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ！！って。ま、馬に蹴られる以前に、血走った目をした女子共に殺されそうだけど…」

「勇樹って空手黒帯だよね？」

「…超馬鹿。行き先が天国から警察に変わるだけだっつの。それに女相手に手なんかあげられねぇし」

「へぇ」

「…1へぇをドウモアリガトウ」

「でも俺らってモテなくて良かったよね」

「ま、目の前の光景を見るとな…そうも思える」

「平穏の大切さが身に染みいるよね」

目の前の戦況は話してた間に変化したらしく、やっとこさ女子から逃げ出した透がまた屋上を走り回っている。

勇樹と信也の援護はもう期待しないようだ。

「休み時間は全てフリーだし」

「女子に追いかけられている友をゆっくり傍観でしるし」

「…ゴリラみたいな女から熱い抱擁を受けなくてすむし」

「その抱擁で圧死寸前の友の青白い顔を写真に収められるし」

「…勇樹も、その性格がなければモテるのにね」

「まったくだな」

だが、アレは御免だ。と疲れによりまた捕獲された透を横目に見ながら呟く。

「恋愛ってこぇぇな」

「でも、それに反比例して男子からの評判は急降下したよね」

「だよな…この前とかそれで何故か俺に因縁つけてきてよー。ま、空手のおかげで3秒で返り討ちだな」

「ははは…男女差別」

「ははははは、上等。思えばアイツの友達やってる物好きって俺ら位だよな」

「そういや、何でだろ」

「モテる不幸がモテない幸福に中和されて丁度いい感じになるんじゃね？」

「そっか？」

「そうやんだよ、きっと」

だから性悪の俺らと律儀君は友達になる運命なのさ。

「まぁ…そうだとしても、だったらますます助ける必要が」

「あるだろうが！！助けろ！！！」

いつの間に会話に参加したのか、透が言葉を発した。
勇樹はムクリと体を起こすと、右手で信也の首根っこを掴みながら言い放った。

「嫌だ。運命だろうが助けるのは俺の勝手だからな…無事に再会したら茶でも贈るから頑張れ」

「性悪…」

「しょうがねぇだろ」

馬に蹴られるなんて嫌なのよ

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9225f/

モテる律儀の不幸とモテない性悪の幸福論

2010年10月29日06時14分発行